

平成22年 5月31日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007年度～2009年度
 課題番号：19611008
 研究課題名（和文） 博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究
 研究課題名（英文） Research on the cataloging, conservation and exhibition of “The Tsuruta Collection” as museological materials
 研究代表者
 浜田 弘明 (HAMADA HIROAKI)
 桜美林大学・人文学系・教授
 研究者番号:30348487

研究成果の概要（和文）：「鶴田文庫」は、博物館学者・故鶴田総一郎旧蔵の博物館及び博物館学に関する蔵書・資料群で、その総量は段ボール箱約250箱に及び、桜美林大学図書館が所蔵している。本研究では、最も公開が望まれている国内外の書籍に重点を置き、約13,000点に及ぶ資料の目録化を実現した。合わせて、鶴田の業績を明らかにしつつ、日本における戦後博物館学の発展・展開過程を検討した。目録化された資料は、桜美林大学「桜美林資料展示室」の「鶴田文庫コーナー」で公開している。

研究成果の概要（英文）：The Tsuruta Collection is a vast collection comprised of a lot of books and materials on museums and museology. It used to belong to a museologist, the late Mr. Soichiro Tsuruta. But now J. F. Oberlin University Library keeps it. We focused on books collection and put around 13,000 books in the catalogue, while we reviewed Mr. Tsuruta's achievement and growth of museology in Japan after World War II. As the result of our project, we exhibit a part of the collection at the section of J. F. Oberlin University Gallery.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：博物館学

キーワード：博物館学、博物館学史、鶴田総一郎、鶴田文庫、資料整理

1. 研究開始当初の背景

(1) 博物館学研究者・鶴田総一郎について

鶴田総一郎(以下、鶴田)は、戦後初の学芸員養成用テキストとして編集された、1956

(昭和31)年1月刊行の日本博物館協会編『博物館学入門』の「博物館学総論」の著者として知られ、平成初期に至るまで永年にわたり博物館学研究の第一人者として活躍した。

鶴田は、長年勤務した国立科学博物館を事業部長で退職し、1978(昭和53)年4月から1988(昭和63)年3月までの10年間、法政大学で初代の博物館学専任教授として勤務した。研究代表者も、その時代に鶴田から博物館学を教授された一人である。法政大学定年後は、中国の復旦大学において、博物館学部の顧問教授として引き続き活躍されたが、残念ながら、病気により1992(平成4)年2月に73歳で逝去された。

鶴田は、大学で生物学(とくに動物学)を専攻していたこともあって、敗戦直後の1945(昭和20)年11月、自ら志願して、当時の文部省科学教育課に奉職し、その後、現場の国立自然教育園(後に国立科学博物館付属自然教育園)、国立科学博物館に勤務し、30年以上にわたり日本の科学教育の振興に尽くした。その一方で、博物館学の進展にも尽力し、先の『博物館学入門』刊行以前の1952(昭和27)年に開催された「第一回文部省学芸員講習会」では、すでに植物園に関する講師をしている。また1973(昭和48)年に発足した全日本博物館学会の創設に関わり、委員として永く学会に寄与するとともに、ユネスコの国際博物館会議(ICOM)の場においても活躍し、日本人としては初の国際博物館学会第一副議長という要職も務めた。

(2)「鶴田文庫」の概要について

改めて言うまでもないが、鶴田博物館学は戦後日本の博物館学の根幹を成すもので、現在もさまざまな博物館学のテキストに紹介されている、資料収集・整理保管・調査研究・教育普及の4つの基本的機能や、もの・とこ

ろ・ひとの3つの基本的要素についての考え方は、先の「博物館学総論」の理論に基づくものである。このような経緯から見ても分かるように、鶴田の蔵書・資料には、昭和戦後期すべてにわたる日本の博物館学文献が含まれ、さらには国内唯一と見られる海外文献も相当数含まれ、国内屈指の海外博物館学関連文献が所蔵されているのである。

鶴田逝去後の、1992(平成4)年9月から12月にかけて数度にわたり、研究代表者は鶴田宅を訪れ、奥様の了解の下、2階全室にまたがる書斎・図書室の資料調査を実施した。自宅スチール製書架は44架に及び、図書のみならず、執筆半ばの手書き原稿類や、鶴田宛の文書・書簡類のほか、写真・ビデオ・図面・パンフレット、さらには国内外の昆虫標本、民族資料なども含まれていた。

これらの資料は、ご遺族のご厚意により、一括してご寄贈頂けることとなり、その後、受入れ先や搬出方法等についての協議を進め、1993(平成5)年1月、最終的に鶴田が勤めていた、法政大学の博物館学研究室(後任・段木一行教授)に「鶴田文庫」(以下「文庫」)として移管することが決まり、運搬作業が行われた。

その後、2002(平成14)年3月に鶴田の後任であった段木教授が退職されたことと、法政大学の学部改組準備等に伴い、「文庫」を保管するスペースの確保が難しくなり、他所に再移管する必要が生じた。同年12月、当初から「文庫」の受入れ実務に携わってきた研究代表者の勤務校である、桜美林大学図書館が新たな受入れ先として決定し、2003(平成15)年2月、鶴田家から正式な寄贈申入れを受け、同年3月に搬入され、今日に至っている。

しかしながら、早い時期の文庫公開が多く、研究者から望まれているにもかかわらず、

人手及び予算上等の学内の事情により、資料整理は遅々として進まないことから、今回の科学研究費公募で、時限付きながら新設された「博物館学」の領域で応募に至った。

2. 研究の目的

「文庫」は、ダンボール箱に換算して 250 箱を超える膨大な量の蔵書・資料群であり、研究計画期間の 3 年間ですべての資料を整理・分類し目録化することは到底不可能である。そこで、最も公開が望まれている、国内外の「書籍」に重点を当て、目録化を実現し、日本における戦後博物館学の発展過程を国内外の専門書から展覧することを計画した。

先にも述べたように、「文庫」には、昭和戦後期すべてにわたる日本の博物館学文献が含まれ、さらには国内屈指の海外博物館学関連文献が所蔵されている。

これまでの博物館学研究において、博物館そのものの歴史研究については、体系的なものとして、椎名仙卓の『日本博物館発達史』（1988 年）『図解博物館史』（1993 年）『日本博物館成立史』（2005 年）及び、新版博物館学講座の『博物館史』（刊行予定）、金山喜昭の『日本の博物館史』（2001 年）があるが、博物館「学史」に関する体系的研究はほとんどない。

また、博物館学研究者に関する個人史的研究事例はさらに少なく、単行本としては、博物館学の祖と言われている棚橋源太郎について記した、宮崎惇の『棚橋源太郎』（1992 年、岐阜県博物館友の会）が唯一で、鶴田総一郎に関しては、拙著の「鶴田総一郎と日本博物館学」（1997 年、『学際研究』第 4 号）が唯一というのが現状である。

このため、本「文庫」の整理及び研究の結果として、本邦初の戦後日本博物館学発達史が展覧できることが期待できるとともに、博

物館学研究者の個人史研究に関する方法論についても確立化への期待ができ、日本の博物館学の進展に寄与する部分は大きいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 全体方針

本研究に先立ち、2002 年度から「文庫」に関する任意の研究会として「鶴田文庫研究会」を、桜美林大学博物館学研究室を事務局として立ち上げ、年数回の会合・研究会を開催し、本「文庫」の整理・分類方法について検討を進めてきた。また、並行して戦後の日本博物館学に及ぼした「鶴田博物館学」の影響力等についても検証を進めて行った。

鶴田文庫研究会のメンバーは、研究代表者（浜田弘明・筆者）、連携研究者（当初・研究分担者、金子淳・静岡大学准教授）のほか、犬塚康博・横山恵美・森本いずみ・平松左枝子・清水周・橋場万里子の 6 名が折、研究協力者として位置づけた。

この中で、森本・平松・清水・橋場の 4 名は、資料整理実務に精通していることから「文庫」の整理・分類法の実務的研究及び「博物館学総論」の検証に参画し、犬塚と金子の 2 名は、博物館学を専門とする立場から「鶴田博物館学」と戦後日本博物館学の史的検証に参画、横山は鶴田総一郎の教え子であることから、鶴田の人物像等の周辺研究について参画した。

(2) 各年度の研究方法

① 2007 年度の研究

初年度は、膨大な量の「文庫」の中で、まず目録化に着手すべき資料（書籍）について選定を行うとともに、その整理・分類法の確立を図った。

これらの体系化が確立され次第、人海戦術

により目録化作業を推進した。また、鶴田総一郎の人物史研究についても並行して進め、基本資料として鶴田自身の著作目録、年譜等の作成を進めた。

②2008年度の研究

2年次目は、引き続き書籍資料の目録化に重点を置き、人海戦術によって目録カード化作業を推進した。さらにカード化された資料については、パソコンにデータ入力し、データベース化を進めた。

なお、分類体系については、普遍性を持たせるために、引き続き、他研究機関等における類似資料の整理・分類例などについて調査を実施した。

また、時間的に可能な限り、書籍以外のパンフレット資料等についても、段ボールやプラスチック製かごに入っている状態の資料を、前後関係を崩さないように留意しながら抜き出し、目録カード化する作業を推進した。

これらの作業と並行して、戦後博物館学史の時系列的検討や、鶴田総一郎の著作目録をもとにした人物史的研究等について、研究会等も開催しつつ、まとめに向けての論議についても展開した。

③2009年度の研究

3年次目（最終年度）は、前年度から継続して、カード化された全資料をパソコンにデータ入力しつつ、独自の資料分類体系によるコード入力作業も進めた。なお、分類体系については、普遍性・一般性を重視し、日本図書十進分類をベースとし最終的な仕上げを行なった。

これらの作業と並行して、研究会等を開催しつつ、最終的な報告書の刊行に向かった。なお、報告書は、論文を主とする「解説編」と、資料目録を主とする「目録編」の2分冊として刊行することとした。

4. 研究成果

(1) 「鶴田文庫」の公開化作業

書籍の整理は、最終的に文庫書籍の8割以上の目録カード化を終えた。この作業と並行して、パソコン入力作業により約13,000点の書籍のデータベース化を進めるとともに、目録刊行に向けての図書分類作業を進めた。

国内文献の「和書」は約7,300点に達し、昭和20年代から50年代に至る博物館・文化財・社会教育関係のものが中心となっている。海外文献の「洋書」は約5,700点、16カ国以上に及び、博物館と博物館学に関するものが多くを占めている。「和書」は日本図書十進分類法を基本として著者・発行者別に、また「洋書」は言語別・図書分類別に整理し、最終的に『報告書』（目録編）として刊行することが出来た。

2008年12月には、桜美林大学内に整備された「桜美林資料展示室」の一部を利用して「鶴田文庫コーナー」を開設し、整理済み資料の公開を開始した。配架は、原資料配列を重視した番号配列とし、各資料には、分類検索のために図書分類番号も付した。

さらに2009年3月には、「文庫コーナー」の学外研究者への公開を兼ね、桜美林大学内において鶴田文庫研究に関する「公開研究会」を開催した。また2009年10月には、成果報告書の刊行に向けて、鶴田文庫研究に関する研究会を開催し、最終的な図書分類方式を検討するとともに、各自の最終的な原稿執筆内容の確認を行った。

これらの作業を経て、鶴田博物館学の再検討を行い、鶴田博物館学を軸とした戦後日本博物館学の研究及び、博物館学研究者・鶴田総一郎の個人史研究に関して『報告書』（解説編）としてまとめることが出来た。

(2) 鶴田総一郎の著作

鶴田の著作物は、所蔵資料から 138 点が確認され、「著作目録」としてまとめた。鶴田の各年代別著作件数は、次のとおりである。

1949～1960 42 件／1961～1970 28 件
1971～1980 46 件／1981～1991 21 件
不明 1 件

内容は、博物館・博物館学に関わるもののみならず、もともとの専門の動物学関係のものも少なくない。

確認された著作物で最も初期のものは、1949（昭和 24）年の『文部時報』863 号に執筆された「国立自然教育園」である。初期の著作は、国立自然教育園勤務当時のもので、1950 年代前半にかけては、自然教育園の普及に努めるとともに、全国の自然博物館の発掘に力を注いでいる。

1950 年代中盤から 1960 年代前半にかけては、動物学・昆虫学関係の著作とともに、理科教育の振興に関わる著作が目立つ。理科教育と科学系博物館との橋渡しに関心を持つ時期と言える。また、1960 年代からは、職責とも関わり、I COM や博物館のあり方に関する著作が増える。

1970 年代に入ると、博物館学を教授する立場から、学芸員論や博物館の定義付けについての言及が目立ってくる。そして、1970 年代後半から 1980 年代にかけては、日本の博物館・博物館学事情を憂いてか、海外事情の紹介に務めるものが増えてくる。

遺稿ともいえる著作が、亡くなる前年の 1991 年に発行された『『博物館学入門』の「博物館学総論」篇を執筆した経緯』である。これにより、鶴田の博物館学に寄せる思いが初めて明らかにされたのである。

(3) 鶴田文庫の全貌

本研究で完了できた「文庫」の書籍資料の目録化点数は 12,982 点で、和書 56%、洋書

44%の割合であった。洋書のうち、85%は英語文献が占めるが、言語は 16 以上に及んでいて、その内訳は次のとおりである。

a. 和書:7,290 点	
b. 洋書:5,692 点	
英語	4,857 点
中国語	169 点
フランス語	144 点
ドイツ語	167 点
スペイン語	56 点
ロシア語	52 点
イタリア語	35 点
ポルトガル語	9 点
スウェーデン語	8 点
ノルウェー語	8 点
オランダ語	6 点
チェコ語	6 点
スロバキア語	6 点
デンマーク語	2 点
ハンガリー語	1 点
ルーマニア語	1 点
不明・その他言語	165 点

点数の多い和書と英語文献については、図書分類を行った。日本図書十進分類を基本とした本文庫の独自分類は、次のとおりである。

000 総記

- 051 逐次刊行物（紀要・年報等）
- 061 学術・研究機関
- 069 博物館・博物館学
 - .1 博物館行財政・法令
 - .2 博物館建築・設備
 - .3 博物館管理・博物館職員
 - .4 資料の収集・整理・保管
 - .5 資料の展示・利用・宣伝
 - .6 一般博物館
 - .7 学校博物館
 - .8 専門博物館
 - .9 博物館

.10 博物館教育

- 100 哲学・宗教
- 200 歴史・地理・地誌
- 300 社会科学・教育学
- 400 自然科学・生物学
- 500 技術・工学・生活科学
- 600 産業
- 700 芸術・美術・文化・文化財
- 800 言語
- 900 文学

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 浜田弘明 「博物館学資料『鶴田文庫』の整理と公開化作業」Obirin Today、桜美林大学教育センター群、査読なし、9号、2009、pp. 63-74。

[学会発表] (計3件)

- ① 浜田弘明 「『鶴田文庫』整理資料目録のための分類法について」鶴田文庫研究会、2009. 10
- ② 浜田弘明 「『鶴田文庫』の整理と公開化作業について」鶴田文庫研究会、2009. 3。
- ③ 犬塚康博 「鶴田総一郎の博物館論と現実」鶴田文庫研究会、2009. 3。

[図書] (計2件)

- ① 浜田弘明 (研究代表者) 『博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究 [解説編]』桜美林大学リベラルアーツ学群博物館学研究室 (科研費研究成果報告書)、2010、p. 80。
- ② 浜田弘明 (研究代表者) 『博物館学資料「鶴田文庫」の整理・保存及び公開に関する調査・研究 [目録編]』桜美林大学リベラルアーツ学群博物館学研究室 (科研費研究成果報告書)、2010、p. 256。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜田 弘明 (HAMADA HIROAKI)
桜美林大学・人文学系・教授
研究者番号：30348487

(2) 研究分担者

金子 淳 (KANEKO ATSUSHI)
静岡大学・生涯学習教育研究センター・
准教授
研究者番号：00452178
(2008年度から連携研究者に変更)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

犬塚 康博 (INUZUKA YASUHIRO)
元・名古屋市博物館・学芸員

横山 恵美 (YOKOYAMA MEGUMI)
豊島区立郷土資料館・学芸員

森本 いずみ (MORIMOTO IZUMI)
糸魚川市教育委員会・民俗資料調査嘱託

平松 左枝子 (HIRAMATSU SAEKO)
元・くにたち郷土文化館・学芸員

清水 周 (SHIMIZU AMANE)
国立市教育委員会・学芸員

橋場 万里子 (HASHIBA MARIKO)
パルテノン多摩・学芸員